



で き こ と

10月29日(月)グランシップにて「静岡県図書館大会」が開催されました。

午後はテーマ別に分かれて事例発表や講義などの分科会が行われました。子どもの本に関しては、第6分科会が「学校図書館と公共図書館を使いこなして、学びを深めよう。～発見！意外に知らない図書館活用術！」をテーマに開かれました。

静岡市立蒲原東小学校長の岡田克彦氏から、県立中央図書館の勤務体験から学ばれたことや金谷図書館長としての取組を紹介していただきました。また、慶應義塾大学非常勤講師で千葉県市川市学校図書館支援スタッフの小林路子氏からは、学校図書館の活用術についてお聞きしました。(2ページ目にて、概要を紹介します。)

11月16日(金)、沼津市立図書館を会場として、県立中央図書館新刊児童図書巡回展示研修会が開催されました。

当館職員による「新刊児童図書紹介」、県総合教育センター学校図書館担当指導主事による「学校図書館充実のための選書のあり方」のお話の後、「新刊児童書の選書について—公共図書館の視点から—」と題して、元浜松市立中央図書館長でもあり、司書として長く児童サービスに携わってこられた松本なお子氏に講義をしていただきました。講義終了後の「新刊児童図書の閲覧及び資料相談」の時間では、会場に並んだ約1,000冊の新刊児童図書を前に、選書に関する相談に応じました。

(3ページ目にて、概要を紹介します。)

◇子ども図書研究室のテーマ展示◇

- ◆「チョコレートの本」
チョコレートに関する本を展示しています。
- ◆「第24回 読書感想画中央コンクール指定図書」
今回の指定図書を展示しています。

◇イベント情報 その1◇

◆新刊サロンのご案内

新刊を囲んでおしゃべりしませんか？

第4回 12月19日(水) 10:30~

第5回 2月20日(水) 10:30~

会 場：県立中央図書館 子ども図書研究室

申込み：来館・電話・メールまたはFAXのいずれかの方法でお申し込みください。開催約1か月前からHPのイベント情報ページに案内を出し、受付をします。なお、当日のご参加も可能です。

問合せ：県立中央図書館 資料課
静岡市駿河区谷田 53-1
FAX：054-264-4268
TEL：054-262-1243

◇イベント情報 その2◇

◆国際子ども図書館展示会

「セント・ニコラス：

世界の子どもたちが集った雑誌」

国際子ども図書館は、12月4日(火)から、展示会「セント・ニコラス：世界の子どもたちが集った雑誌」を開催します。この展示会では、アメリカで最も優れた児童雑誌といわれた「セント・ニコラス」を国際子ども図書館の所蔵資料の中から約30点選んでご紹介します。文学作品や科学読み物、世界の子どもからの投稿や日本についての記事と、バラエティに富んだ展示をお楽しみください。

開催期間：平成24年12月4日(火)

～平成25年2月3日(日)

時 間：午前9時30分～午後5時

休 館：月曜日、国民の祝日・休日、年末年始(12月28日～1月4日)、12月19日、1月16日(資料整理休館日)

会 場：国際子ども図書館3階ホール ※入場無料
〒110-0007

東京都台東区上野公園 12-49

TEL:03-3827-2053(代表)

TEL:03-3827-2069(録音による案内)

静岡県図書館大会 第6分科会 学校図書館 報告

小 学校教諭だった岡田氏は、39才の時に県立中央図書館へ異動になり、10年間の勤務を経て、金谷町の図書館建設に携わり、現島田市立金谷図書館の初代館長になりました。現在は、静岡市立蒲原東小学校の校長として、どうしたら子どもたちが学校図書館に足を運んでくれるか、日々考えながらいろいろな取組を行っておられます。

公 共図書館の利用者は幅広いが、学校図書館の利用者は子どもたちであり、利用する機会は必ずある。だからこそ、環境づくりが大きな役割を担ってくる。——例えば、展示する本には必ずコメントを添える、図書室で子どもたちを迎える時は笑顔で接するなど、学校図書館ならではの魅力を伝えることによって、子どもたちがもっともっと学校図書館を好きになり、足を運ぶようになるそうです。「あいさつ」と「笑顔」の大切さは、岡田氏が金谷図書館長として、“開かれた共に成長する図書館”を目指し、取り組まれた時の経験から、再認識されたそうです。

ある時、低学年のトイレの便器が汚れることが何日か続き、気になった岡田氏は、メッセージを込めて、宮西達也さんの『うんこ』という絵本を子どもたちに読み聞かせしました。すると、次の日から便器の汚れがピタリとなくなり、絵本の持つ力のすごさを改めて感じたそうです。その他にも、選書の重要性、子どもたちの欲している本とこちらが手渡したい本とのずれの修正、思い切った本の廃棄についても触れられました。目の前の課題を解決する具体的な方法を教えていただいたように思います。

後 半は、慶應義塾大学非常勤講師であり、千葉県市川市で学校図書館支援スタッフとして活躍されている小林路子氏に、学校図書館

での取組についてご紹介いただきました。

市川市は公共図書館に児童サービススタッフが常時7、8人おり、巡回公用車で学校図書館への貸出し数は年間6万冊にも及ぶそうで、公共図書館の学校支援の手厚さや学校図書館との連携の深さに驚かされました。そんな中で、学校図書館支援スタッフをされている小林氏は、学校図書館を活用した授業をどう組み立てていくかが、これからの学校図書館の課題であると指摘されました。

本 さえそろってればいい授業ができると思いがちですが、一人ひとりが課題を追究していく授業では情報活用能力が必要とされ、それだけに教師の力量や授業の計画性が問われてきます。また、読み聞かせは家庭でもできますが、子どもの“調べる”という力は、学校図書館活動を通して養っていくものです。ですから、“きちんと”、“できるだけ短い時間に”、“くり返しやっていく”ことが、子どもに必要な情報活用能力を身に付けさせる方法だと小林氏は言います。具体的には、校外学習や修学旅行などの事前・事後に利用する、「図書館クイズ」を子ども自身が作成する、読み聞かせやブックトークを取り入れるなどの例を挙げられ、こちらが多様なイメージを持って学校図書館活動を計画することが大切であると感じました。

所蔵資料から

知識

『クシュラの奇跡

140冊の絵本との日々』

のら書店

ドロシー・バトラー 著

百々 佑利子 訳

2006年3月



複雑な障害をもつ少女クシュラが、本を仲立ちとしたコミュニケーションによって目覚ましい成長を遂げる感動の記録。

(島出)

県立中央図書館 新刊児童図書巡回展示研修会

新刊児童図書紹介では、出版状況、東日本大震災に関連して出版された図書や、新訳や復刊状況などの紹介がありました。

次に、県総合教育センターの飯島指導主事から、「学校図書館充実のための選書のあり方」と題して、学校図書館の機能や学習指導要領における学校図書館の位置付け、利用される学校図書館について、また、県内の学校図書館活用事例を何点かお話いただきました。

その後は、松本なお子氏から「新刊児童図書の選書について—公共図書館の視点から—」と題して講義をしていただきました。



選書の意義は、「利用者の要求に応える」「図書館への期待に応える」「予算を有効に使う」ということにあり、児童書の選書に当たっては、対象が成長著しい子どもであることを忘れないことが大切です。また、個々の資料の評価と選書の前には、選書方針・蔵書構成（現状）・役割（収集分担）・利用状況・予算を確認する必要があります。

選書の方法には現物選定とリスト選定があります。現物選定は、内容確認ができるが、確認できる図書に限られる、あるいは、一定期間内に購入の可否を判断しなければならないといったデメリットがあります。一方でリスト選定は、短時間で処理できる、現物選定より広範囲に把握できるが、詳細な内容の把握が困難、初心者には判断が困難、リスト作成者の価値観に左右されやすいなどのデメリットが挙げられます。これらを踏まえて、選書の際は、リスト選定も行いながら、必要に応じて現物選定も行うことがよいでしょう。現物選定の際には、県立中央図書館の全点収集資料も利用できます。

個々の資料の評価と選定の際には、各ジャンルの定番と言われる作品と比較していくこととなりますが、それら定番のものに匹敵するよう

な良い図書というのは滅多に出ないものです。しかし、そこまでではない資料も、今を生きる子どもたちには必要であり、とすると、その許容範囲をどうするかが、選書であるとも言えます。そして、その許容範囲は、選書の前に確認した、「選書方針・蔵書構成・役割・利用状況・予算」によって、図書館ごとに決まってきます。読む力を付けるためには低年齢の時から良いものを手渡してゆくことが大切であることを考えると、“赤ちゃん絵本”、“絵本”の許容範囲は狭く、“読み物”の許容範囲は、“絵本”に比較すると、広くなると考えられます。

選書の後には、選んだ資料をどのように手渡すかも大切です。展示、リスト、読み聞かせ、ブックトークなどで積極的に子どもに手渡す、必要な場面で子どもに手渡す、研究・研修に役立つ、などが考えられます。



講師の言葉、「読む力を付けることは、“目的”ではありません。子どもがよりよく生きるための“手段”です。」が印象的でした。

講義の後には、今年6～8月に発行された約1,000冊の児童図書の新刊全点を閲覧しながら、参加者からの質問、相談を受けました。参加者はメモを手にも真剣に閲覧し、静かな熱気が感じられました。アンケートからは、参加者の方々がそれぞれ選書に悩みを持っていることが分かりました。今回の研修会がこれからの選書に役立つことを願っています。

所蔵資料から



『子どもと科学よみもの』(月刊)
科学読物研究会
341号(2004年5月) -
426号(2012年11月) +
(継続中)

松本講師が講義中に紹介した雑誌の中の一つ。科学読物研究会の会報。子ども向けの科学読み物や科学遊びが紹介されている。

(鈴木由)

新着資料から

知識

『イクバルと仲間たち
児童労働にたちむかった人々』



スーザン・クークリン／著
長野 徹・赤塚 きょう子／訳
小峰書店
2012年9月

4歳から10歳まで、1日12時間、週6日、絨毯織りの労働を強いられたパキスタンの少年イクバル・マシー。自由の身になった彼は児童労働の撲滅のために立ち上がる。

12歳で銃弾に倒れるまでの彼の生涯を軸に、同じように労働を強いられる子どもたちの例や児童労働解放運動などを、児童労働がなかなか無くならない背景も含めて丁寧に書いた作品。

イクバルを描いた本には他に創作色の強い『イクバルの闘い』があり、それと併せて紹介しても良い。【小学校高学年から】 (児玉)

文学

『魔術』



芥川 龍之介／作
丹地 陽子／絵
宮川 健郎／編
岩崎書店
2012年9月

主人公の「わたし」はある雨の晩に、インド人に魔術を教わることになる。その魔術は誰でも使えるけれど、欲のある人間には使えないものだという。まず“欲を捨てること”「あなたにはそれができますか」とインド人は問う。果たして「わたし」は魔術を使うことができるようになるのか。原作は1920年に『赤い鳥』に掲載された芥川龍之介の童話である。『1年生からよめる日本の名作絵どうわ』の中の1冊だが、脚注が多く、一人で読むなら中学年からが望ましい。【小学校中学年から】 (小松)

文学

『きみスキ
高校生たちの
ショートストーリーズ』



梨屋 アリエ／著
ポプラ社
2012年9月

高校1年生男女7人の青春ストーリー。恋や友情、家族、部活、進路に悩む姿が、章ごとに一人称でいきいきと語られる。

各章は非常に短く、ラスト近くこそ10ページを超す章があるが、それ以外はほとんどが5～10ページである。著者はあとがきで、本を読み慣れない、読書が得意でない読者でも、自分のペースで読み進めることができるよう、あえて掌編小説にしたと書いている。テーマの身近さもあり、著者の狙いどおり、読みやすく仕上がっている。【中学生から】 (鈴木由)

絵本

『ミシュカ』
マリー・コルモン／文
フォードル・
ロジャンコフスキー／絵
みつじ まちこ／訳
新教出版社
2012年10月



クリスマスの前夜、わがままな小さなご主人のもとを飛び出したクマのぬいぐるみジェシカ。雪の中をザックザックと歩いてくと、いろいろな出来事に遭遇する。自分の足で歩いていくということは、何て素敵なことだろう!森の中で、今夜は何かひとついいことをしなくてはいけないことを知ったジェシカは、トナカイに会い、プレゼント配りを頼まれる……。

読み終わった後、自分もクリスマスプレゼントをもらったような幸せな気持ちになれる一冊である。【3、4歳から】 (島出)